福岡女学院大学紀要　人文学部編　第三十二号
二〇二二年三月

古典の授業における創作活動

―序詞創作と「百人一首」翻案―

小林賢太

古典の授業における創作活動

―序詞創作と「百人一首」翻案―

小林賢太

一　はじめに

多くの中学生や高校生は、古典の授業に対して好感を持っていないようである。例えば、「平成17年度　高等学校教育課程実施状況調査」[1]では、「古文は好きだ」という質問に対して「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と答えた生徒の割合は七二・六％にも上る。また「平成25年度　全国学力・学習状況調査」[2]においても、「古典は好きですか」の質問に、七〇・〇％の生徒が否定的な回答をしている。これらはあくまで一例であり、このほかにも多くの調査やアンケート類から古典の授業に対する否定的な回答が見出せる。[3]

こうした古典嫌いの原因は様々に考えられるが、そのひとつとして古典文学の世界と学習者の日常との乖離が指摘されている。[4]たしかに学習者が古典を遠い過去のもの、自分とは関係のないものとして認識していれば、学習意欲は高まりにくく、否定的な印象を持つ者も多くなるであろう。翻って考えると、学習者が古典に対して親近感を持つことができれば、学習意欲の向上が期待できよう。古典に対して親近感を持つためのひとつの手段としては、

創作活動が挙げられる。創作という主体的な活動によって古典との距離を縮め、古典に親しむことができるのではないか。ただし創作するためには、対象についての十分な理解が必要となる。例えば、和歌の実作を行おうとすれば、和歌特有の修辞技法について理解しておかなければならない。創作活動は単に「親しむ」だけでなく、学習内容の深い理解にも繋がっていくはずである。

そこで本稿では、稿者が授業で実施した和歌に関連する創作活動を取り上げ、その方法や意義について考察していきたい。具体的には、序詞の創作・「百人一首」和歌の短歌への翻案という二つの実践を検証していく。

二　先行研究

和歌を教材とした創作活動の研究は、これまでにも多くある。そのうち森田直美は学生が古典に対して感じている「遠さ・無縁さ」に着目し、それらを解消して古典に親近感を持たせる試みの重要性を指摘する。[5] そして一例として、比喩歌の創作を実践し、その有益性を論じた。森田の実践はいきなり和歌一首を創作させるのではなく、まずは比喩の部分のみを、ひとまず五七五七七の韻律を気にせず創作させるもので、学習者にとっては取り組みやすい有効な方法である。このほかの実践としては、鈴木宏子による序詞を用いた和歌の創作が挙げられる。[6] 鈴木の実践は、「恋もするかな」という決まり文句を第五句に置いたうえで、その恋心を表現するに相応しい序詞を創作させるものである。「心情表現と物象の対応」は和歌の特徴のひとつであるが、これに対する理解を深めるために、序詞の創作は有効な方法であろう。両者の授業実践の共通点としては、自由度を高めすぎず、ある程度の方向性を学習者に示していること、また創作の前に和歌の修辞技法についての十分な解説を行っていることが挙げられる。

一方で、和歌を他の形式に翻案する試みも行われている。例えば、加古有子は「百人一首」の歌を〈超訳〉する

授業を実践し、その有用性を指摘している。[7] 加古論によると、「わかりやすさ」を重視する〈意訳〉では繊細な言葉のニュアンスは優先されないが、〈超訳〉には「洗練された滑らかさ」、「文学的にも魅力的で面白いこと」が求められる。即ち、上手く超訳するためには、元となる和歌の細やかな表現を丁寧に理解しておくことが必要である。その点において、超訳は古典和歌を深く理解するための一助となるであろう。植山俊宏は「百人一首」をもとに返歌・類想歌を創作する実践研究を行ったうえで、創作活動は「古典と学習者を上下関係・垂直構造に位置づけることから脱する方法」となり得ることを指摘した。[8] また池田匡史は大村はまの実践[9]をもとに、「百人一首」の和歌を詩の形式に作り替える試みを行った。[10] 池田の実践の特徴は、「百人一首」の百首すべてをクラス全員で訳詩する点にある。百首を網羅することで、「百人一首」という作品そのものへの理解も促そうとする試みである。勅撰和歌集に代表されるごとく、そもそも和歌集は一首一首が独立しているように見えて、全体でひとつの世界を構成している。歌集という作品全体に目を向けさせるという点に関しては、家永香織が歌集を編纂する授業実践を行っており、和歌文学を深く理解するための実践的な方法を示している。[11]

これら多くの先行研究を参考に、稿者もまた古典の授業における和歌関連の創作活動を試みた。まずは序詞を用いた古典和歌の創作について考察していきたい。

三　序詞の創作

本実践を行ったのは、二〇二一年度前期開講科目「日本の文学（古典ＢＩ）」である。受講者は三七名、国語の教員免許取得を目指す学生も数名いるが、多くの学生はそうではなく、古典文学を専門的に学んできたわけではない。『新古今和歌集』を扱った数回の授業の後、この和歌創作の実践を行った。

授業ではまず序詞や掛詞、縁語といった基本的な和歌の修辞技法について、『新古今集』の歌を例にしながら解説を行った。その際、序詞については特に丁寧に解説した。「景物の表現を契機として本旨を導く技巧[12]」である点を例歌を挙げながら説明し、実際に創作する際にも景物と心情の対応を意識するよう伝えた。

なお自由度が高すぎると学習者が困惑する可能性が高いため、創作に際しては下の句を次のように固定した。

（5　7　5）人に知られぬ恋もするかな

相手に知らせることのできない秘めた恋心を詠んだ歌であることを学習者に伝え、まずは「人に知られぬ恋」を例えるなら何が良いかを考えさせた。その際、例として次の二首を示し、簡単に解説した。

河の瀬になびく玉藻のみがくれて人に知られぬ恋もするかな（古今集・五六五・紀友則）

秋ふけて深山にふかく入る鹿の人に知られぬ恋もするかな（安撰和歌集・二六・法印成厳）

あまり多く例を示すと例歌に引きずられてしまう可能性があるため、二首にとどめた。その後、各自が考えた比喩を五七五の音に整えるよう指示をした。なお今回は文語ではなく口語でよいとしたが、学習者の状況に合わせて文語で作らせても良いであろう。次に学生たちの作品を数例掲げる。

三日月が雲に隠れる帰り道人に知られぬ恋もするかな

かくれんぼ早く見つけてこの気持ち人に知られぬ恋もするかな

溢れ出す思いの蛇口ぎゅっと締め人に知られぬ恋もするかな
鍵付きの日記にねむる宝物人に知られぬ恋もするかな
頬つたう涙のしずくは海の底人に知られぬ恋もするかな

雲に隠れる月、かくれんぼ、蛇口、鍵付き日記の中身、海底の涙など、多種多様な比喩を五七五の韻律に表現することができている。授業後に学生が書いたリアクションペーパーには、五首目の歌の「涙・海の底・恋」というキーワードから人魚姫の物語を想像したとの感想があった。言葉の連想によってある物語が想起できるというのは、本歌取りや物語を踏まえた和歌に繋がるものであり、そうした難解な和歌を理解する学習活動にも展開させていける可能性を秘めていよう。同様にもう一首、創作を行った。

（　5　　7　　5　）ゆくへも知らぬ恋もするかな

行き先の分からない恋を表現した歌であることを学習者に伝え、先ほどと同じように、それを例えるに相応しい景物を考えさせた。この際も例となる歌を数首示した。

風吹けば空にたなびく浮き雲のゆくへも知らぬ恋もするかな（散木奇歌集・一二三三）
山川のいくひにかかる白波のゆくへも知らぬ恋もするかな（散木奇歌集・一二三八）
夕されば空にわかるるむら鳥のゆくへも知らぬ恋もするかな（散木奇歌集・一二四一）

学習者が創作した作品から数例を次に掲げる。

寒空に儚く消える白い息ゆくへも知らぬ恋もするかな
風吹けば水面に落ちる花びらのゆくへも知らぬ恋もするかな
青空に吹き飛ばされたたんぽぽのゆくへも知らぬ恋もするかな
幼子の手よりはづるる風船のゆくへも知らぬ恋もするかな
しゃぼん玉まだ割れないでもう少しゆくへも知らぬ恋もするかな

空に消えていく吐息、水面の花びら、飛んでいくたんぽぽの綿毛や風船、シャボン玉など様々な事象を詠んだ歌が提出された。ただし、前掲した「人に知られぬ恋もするかな」の創作作品に比べると、この「ゆくへも知らぬ恋もするかな」の方は、タンポポの綿毛や水面の花びらなど似たような発想の歌が多かった。「行く先が分からない」という条件の方が縛りが強かったようである。縛りが強いということは類型的になりやすい反面、創作しやすい一面もある。そのため、創作の順序としては「ゆくへも知らぬ恋もするかな」を先に行った方が取り組みやすかったかもしれない。

創作をした次回の授業では、全員分の作品を匿名の状態でまとめたもの配布し、稿者が一首ずつ読み上げながら鑑賞していった。その後、自分が創作した二首のうち自信のある方を決めてもらい、全員分の自讃歌の内どの歌が良いと思ったか投票を行って上位五作品を発表した。授業後の学習者のコメントを次に掲げる。

・今回はみんなが作った和歌を詠むことができてとても楽しかったです。下の句は同じなのに上の句が違うだ

けでかなり印象が変わったりして面白かったです。

・与えられた条件は同じなのに、人によって表現の仕方が全く違っていて、面白いなと感じました。

・他の人が作った和歌で、私も同じ言葉を使っていたものがありましたが全然違う雰囲気を感じ不思議でした。

・自分と同じタンポポを使った歌でも、その使い方が全然違っていて新しい使い方を知ることができました。

・同じものを例えとしてあげていても、人によってそれぞれ表現の仕方が違っていて、おなじものでも全く違った雰囲気の作品となっておりどれも大変素敵でした。

右のように、下の句が固定されていても上の句によって全くイメージが異なること、あるいは上の句で同じ景物を用いていても創作者が異なれば歌のイメージも異なってくることに関心を持った学生が多かった。和歌はある程度の型が固定された類型性の文芸であるが、その型の中でいかに自由に、新しく詠むかが醍醐味の一つである。まさに和歌の、そして序詞の効用を実感をもって学習できたと言えよう。また次のように、他者の作品を鑑賞できたこと、他者から評価されたことに感心を持った感想も目立った。

・私がつくった上の句が最後まで選ばれたので、共感されたんだなととても嬉しかった。和歌をつくるコツを掴めた感じがするので、他にもつくってみたい。

・他の方の作品を見てみると自分では思いつかない視点であったり表現があってとても新鮮に感じました。

・私の作った和歌どちらも自信がなかったので、どちらにしようかなで選んだのですが、最終投票の五首に残ることができたのでびっくりしました。すごく嬉しかったです。

・自分の和歌が選ばれてとても嬉しい気持ちです！　…（中略）…他の皆さんの歌は、日常や自然から虚しさ

を引き出しているものが多くてとても共感できました。特に、溢れる思いを蛇口から流れる水に、そしてぎゅっと蛇口を閉めることで気持ちに蓋をするという歌がリアルで、心情が伝わる凄い表現だと思います。

作るだけでなく、お互いに鑑賞し合うのは新しい発見があって楽しいですね。

・和歌を作ったことが今までなかったのですが、自分で作ってみるのも楽しく、ほかの人の物を見るのも楽しいことに気づきました。昔の人が和歌を作り、詠みあっていた気持ちが分かった気がします。

他者への共感、他者からの共感の双方が実現できたとすれば、匿名ながらも学習者同士のコミュニケーションをはかることに成功したと言えよう。さらに少人数であれば、歌会形式で互いの歌について話し合うことも有意義である。序詞の創作は読むことに偏重しやすい古典の授業において、「書くこと」「話すこと」「聞くこと」にも展開させていける可能性があるだろう。また最後のコメントにあるように、古人が和歌を詠み合っていた気持ちが多少なりとも理解できたとすれば、古典和歌と学習者との距離を縮めることにも成功したことになる。

四　「百人一首」和歌の翻案

次に、「百人一首」の翻案に関する実践を取り上げる。本実践は稿者の前任校の中学校にて二〇一八年度に行ったものである。中学三年生、一クラス約四〇名を五クラス、計約二〇〇名が対象の古文の授業で実施した。学習者たちは、中学一年生から「百人一首」の和歌を一首ずつ学習してきたことに加え、年に一度「百人一首」大会も行っており、「百人一首」にはある程度触れてきた。また短歌の創作も何度か行っており、和歌や短歌にはそれなりに接してきたことは留意しておきたい。

まず、古典和歌を口語短歌に翻案する例として、俵万智訳の『伊勢物語』（少年少女古典文学館　第二巻）を紹介した。[13] 当該訳は和歌を現代語訳する際、五七五七七の口語短歌に詠み替えており、歌のリズムを崩すことなく味わえる。一例として二十四段のいわゆる「梓弓」の章段の和歌と、俵万智訳の短歌を紹介した。実際の授業では順序を入れ替え、どの歌とどの歌が対応するかをクイズ形式で問うたが、本稿では順序通り歌を掲げるにとどめる。

『伊勢物語』原文[14]

あらたまのとしの三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ
あづさ弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ
あづさ弓引けど引かねどむかしより心は君によりにしものを
あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる

俵万智訳『伊勢物語』

三年を君にささげてまちわびて今夜打たれるはずのピリオド
梓弓ま弓つき弓これからは我と思って彼を愛せよ
梓弓ひかれひかれて今もなお心は君にひかれるばかり
まつという愛の形もなくなってわたしが選ぶこれがピリオド

簡単に解説を加えた後、次の内容のワークシートを配布した。実際の配布物はＢ５サイズの用紙を横向きに用い、書き込む欄も左記のものより幅を広くとったが、本稿では紙幅の関係上、内容のみを掲げる。

◆ 選んだ「百人一首」の和歌

（　　）

◆ 和歌の主題

（　　）

◆ キーワード

（　　）

◆ 詠みかえた現代短歌

（　　）

☆ ヒント

・五七五七七のリズムは崩さないようにしましょう。

・物の名前や地名は現代的なものに置き換えても面白いでしょう。

・ひらがな、カタカナ、漢字の組み合わせにも気を配ってみましょう。

裏面には三首の例を挙げた。これらの例は、過去の生徒作品に若干の手を加えたものである。実際の配布物では元の歌と翻案短歌とで文字のフォントや大きさを変えたが、本稿ではフォントや大きさは同一にし、内容を記すにとどめる。なお、四角で囲まれた数字は「百人一首」の歌数である。

2　持統天皇

春すぎて夏きにけらし白妙のころもほすてふあまのかぐ山

主題（夏になった季節感　夏のさわやかさ）

キーワード（白い衣　天の香具山）

春すぎて季節はうつり夏服の白があふれる三年二組

40　平兼盛

しのぶれど色に出でにけりわが恋は物やおもふと人のとふまで

主題（隠そうとしてもバレてしまう程の恋心）

キーワード（隠す　恋　色に出る）

かくしても顔に出ちゃうよ　I　LOVE　YOU　どうしたのって人が聞くんだ

51　藤原実方朝臣

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆるおもひを

主題（燃えるような思いを知ってほしい　言いたいのに言えない恋）

キーワード（さしも草　燃える思い　火）

いつの日かもしもしもしもさしも草もしも言えたらもえる思いを

ワークシート配布後は裏面の例を用いて、取り組み方を次のように説明した。

① 学習者全員が持っている「百人一首」の解説書、および国語便覧で和歌の意味を確認し、その歌のテーマは何かを考え、「主題」の空欄に記入する。

② その歌のキーワードと考えられる単語を考え、「キーワード」の空欄に記入する。

③ 主題の内容やキーワードの単語を現代風に言い換えるとしたら、何に該当するか考える。

④ 主題の内容を現代的な感性・言葉で五七五七七になるよう詠み替える。

どの歌を翻案するかは学習者自身に任せ、これまで学習した「百人一首」の歌から自由に選ばせた。ただ、この方法は自由度が高くなる半面、対象とする歌を決めるまでに時間がかかってしまった学習者もいたため、ある程度候補になる歌を絞って提示した方がよかったかもしれない。各自苦心しながらも、多くの生徒は授業時間内に歌を仕上げることができた。生徒の作品数例を次に掲げる。

儀同三司母

54 わすれじの行すゑまではかたければけふをかぎりのいのちともがな

いつの日かあなたが私を見捨てたら…あぁ恐い恐い今日死んじゃいたい

左京大夫道雅

63 今はただおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな

いまはただ別れの言葉それだけを届けるために一目会いたい

素性法師

21 今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな

今すぐに行くといわれて待ってたが結局嘘だ女はつらい

後京極摂政太政大臣

91 きりぎりす鳴くや霜よのさむしろに衣かたしきひとりかもねん

こおろぎが鳴いてる冬の寒い夜あのひと来ずにぼっちで寝るよ

文屋朝康

37 しら露をかぜの吹きしくあきののはつらぬきとめぬ玉ぞちりける

秋風に吹かれて止まらずはじけてく宝石箱に入れたい白露

藤原義孝

50 君がためをしからざりしいのちさへながくもがなとおもひけるかな

君の為たとえ火の中水の中けれどまだまだ君と生きたい

おおむね五七五七七の韻律を守り、短歌の形式に仕上げることに成功している。現代短歌に詠み替えるためには、もとの歌の主題をしっかり理解しておく必要がある。和歌を別の形式に翻案する行為は、もととなる歌の理解を促す効果があるだろう。また三首目の素性法師詠を翻案した創作作品は、歌の主体を「女」と明記し、「待つ女」の

嘆きを表現できている。当歌は『古今集』巻十四・恋四（六九一）が出典で、巻十四には「待恋」の歌が並んでいる。内容からしてもこの素性歌は「待つ恋」だが、古典和歌における「待つ恋」は女の立場で詠まれるのが常である。作者と和歌の主体の性別が異なる例は古典和歌によくあるが、この歌を翻案した学習者はこうした現象を自然に受容できたのではないか。また四首目の作品では、平安期の「きりぎりす」という語が現在の「こおろぎ」を指していることを踏まえて翻案できている。古典和歌の翻案は単に主題の理解を深めるだけでなく、現代短歌にはあまり見られない和歌特有の特徴や文化的変遷の理解に繋げていくことも可能であろう。なお各自の作品は匿名でプリントにまとめ、次回の授業で配布、クラスごとに鑑賞した。

五　おわりに

本稿では和歌を用いた二つの創作活動について考察してきた。いずれの実践も、和歌と学習者との距離を縮めて親近感を持たせるだけでなく、和歌の主題や修辞技法の理解に繋げることができたと思われる。また古人が歌を詠む際に感じていたであろう苦心や楽しみを想像する学習者もいた。さらに創作した作品を全員で共有して評価し合うことで、学習者同士のコミュニケーションも成立し、〈場〉の文芸というものをささやかながら経験することができたのではないだろうか。

もちろん全ての学習者が問題なく順調に作品を創作できたわけではなく、仕上げるまでに相当に苦労したり、提出できなかったりするケースもあった。今後は、そうした学習者が少しでも取り組みやすい方法を考案していきたい。本稿で取り上げた事例を考慮すると、創作の際は自由度を高めすぎるとかえって取り組みにくくなるため、ある程度の方向性を教員が定め、示しておくことが有効と考える。また参考として例をいくつか示しておくことも有

意義であろう。ただしこれも、数が多すぎると例に引きずられて自由な発想を妨げてしまう可能性があるため、程よい数に絞っておく方が良いだろう。

読むことが中心になりやすい古典の授業において、創作という活動は学習者に刺激をもたらし、主体的に理解する学習となり得るだろう。今後も実践と検討を重ねていきたい。

注

（1）国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成17年度　高等学校教育課程実施状況調査　教科・科目別分析と改善点（国語・国語総合）」（二〇〇七年四月）。

（2）国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成25年度　全国学力・学習状況調査　調査結果資料〈全国版／中学校〉」（二〇一三年十二月）。

（3）ベネッセ教育総合研究所「ＶＩＥＷ21」高校版二〇〇六年六月号「データが語る高校の実像／教科・科目の好き嫌い」〔https://berd.benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2006/06/03data_jituzo_01.html〕（閲覧日　二〇二一年六月六日）など。

（4）一方で、このような「乖離」「遠さ」に学習価値を見出すことも可能である。学習者が自らと距離を感じるもの、言い換えれば「異質なもの」と出会い、異質性と向き合うこともまた必要であろう。これに関しては稿を改めて考えたい。

（5）森田直美「中学校・高等学校における古典文学教育の授業実践案―比喩歌の創作体験の有効性と、今後の課題について―」（『川村学園女子大学研究紀要』二八-二　二〇一七年三月）。

（6）鈴木宏子「古典和歌を詠もう―高大連携授業における実践とその分析―」（『千葉大学教育学部紀要』六七　二〇一九年三月）。

（7）加古有子「「超訳」という可能性―大学における小倉百人一首の授業より―」（『愛知教育大学大学院国語研究』二五　二〇一七年三月）。

（8）植山俊宏「中学生の和歌創作学習に関する実践的研究―百人一首にかかわる返歌、類想歌創作の試み―」（『教育実践研究紀要』一八　二〇一八年三月）。

（9）大村はま『大村はま国語教室　第3巻』「口語訳詩集をつくる」（筑摩書房　一九八三年）。

（10）池田匡史「小倉百人一首の訳詩創作活動を通した学びの可能性―「百首でひとつ」という視点から―」（『論叢国語教育学』一四　二〇一八年七月）。
（11）家永香織「歌集を編む―体験型授業の実践報告」（『千葉大学人文研究』四八　二〇一九年三月）。
（12）『和歌文学大辞典』「序詞」（白井伊津子執筆）（古典ライブラリー　二〇一四年）。
（13）北杜夫・俵万智『少年少女古典文学館　第二巻　竹取物語・伊勢物語』（講談社　一九九一年）。
（14）『伊勢物語』和歌の本文は、片桐洋一ほか『新編日本古典文学全集12竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』（小学館　一九九四年）に拠る。

※　和歌の引用は、日本文学Web図書館「新編国歌大観」（古典ライブラリー）に拠る。一部表記を改めた箇所がある。